

9:1 まことに、私はこの一切を心に留め、このことすべてを調べた。正しい人も、知恵のある者も、彼らの働きも、神の御手の中にある。彼らの前にあるすべてのものが、それが愛なのか、憎しみなのか、人には分からない。

9:2 すべてのことは、すべての人に同じように起こる。同じ結末が、正しい人にも、悪しき者にも、善人にも、きよい人にも、汚れた人にも、いけにえを献げる人にも、いけにえを献げない人にも来る。善人にも、罪人にも同様で、誓う者にも、誓うのを恐れる者にも同様だ。

9:3 日の下で行われることすべてのうちで最も悪いことは、同じ結末がすべての人に臨むということ。そのうえ、人の子らの心が悪に満ち、生きている間は彼らの心に狂気があり、その後で死人のところに行くことだ。

9:4 しかし、人には拠り所がある。生ける者すべてのうちに数えられている者には、生きている犬は死んだ獅子にまさるのだ。

9:5 生きている者は自分が死ぬことを知っているが、死んだ者は何も知らない。彼らには、もはや何の報いもなく、まことに呼び名さえも忘れられる。

9:6 彼らの愛も憎しみも、ねたみもすでに消え失せ、日の下で行われることすべてにおいて、彼らには、もはや永遠に受ける分はない。

9:7 さあ、あなたのパンを楽しんで食べ、陽気にあなたのぶどう酒を飲め。神はすでに、あなたのわざを喜んでおられる。

9:8 いつもあなたは白い衣を着よ。頭には油を絶やしてはならない。

9:9 あなたの空しい人生の間、あなたの愛する妻と生活を楽しむがよい。彼女は、あなたの空しい日々の間、日の下であなたに与えられた者だ。それが、生きている間に、日の下でする労苦から受けるあなたの分なのだ。

9:10 あなたの手がなし得ると分かったことはすべて、自分の力でそれをせよ。あなたが行こうとしているよみには、わざも道理も知識も知恵もないからだ。

6節までは「同じ結末がすべての人に来る」という虚無感が満ちていますが、しかし7節からは一転して「神は…喜んでおられる」と、神を認めつつ肯定的な人生観が語られています。一見信仰者の人生観のようですが、しかし「あなたに与えられたむなしい一生」というように、まだここでも虚無感から抜け出してはいません。

おそらく伝道者（著者）は、神を認めない人にも、神を漠然と感じている程度の人にも、また神を信じている人にも共通して受け入れられるような人生観を語っているようです。そのようにして、未信者にも神を認める人生観に触れさせて、そこから神を認め易くすることをねらっているのだと思われれます。

私たちは「喜んで」生きています。また「生活を楽しむ」「自分の力で」精一杯のことをしています。それらは神なき人々とも共通する生き方であり、彼らにも認められるものです。ならばそれを、神の愛によって意義あるものとし、「むなしい一生」ではなく、価値ある一生として生き抜いていきましょう。それが幸いであり、また伝道につながるものでもあります。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

